

B—32 被服纖維素材の組織並びに密度が強伸度に及ぼす影響について

愛知三河纖維試 志満津発司

1. 今までに被服纖維素材の構造性能等に関する研究は非常に少ない。これは大量に生産されている素材が甚だしく実用価値を失なったとき以外は、消費者より構造性能等に関して究明されることがなく、実際上は極めて重要な問題でありながら単纖維や糸程強く要求されていない。加えて三次元的繁雑さのため、その研究がなおざりにされている現状である。本研究においてはこの複雑

な諸性能中、最も重要な性能である繊維素材（織物）の強伸度について経緯糸の密度が強伸度に如何に影響するか、直接的要素である30番単糸を使用織物を試織して各々の関係を究明した。

2. 1. 使用糸綿糸，サイジング機による糊付糸を鈴木式44''力織機にて製織した。経3420本

2. 密度変化によるもの経緯糸密度組合わせ24種類

3. 組織によるもの，平，綾（1/2, 2/2, 1/3）朱子織10種

4. 原糸及び織物並びに引揃え糸群についての強伸度はすべて JIS-L-1004 試験方法に準じて行なった。

3. 一定経糸密度においては緯糸密度の少ない方が強力は大きく、一定緯糸密度においては経糸密度90本/インチ～100本/インチ間において強力最高を示す拋物線を表わす傾向にある。伸度は緯糸密度の増加にともない増大した。